

令和4年度理科

教科	理科	科目	化学基礎	単位数	2	年次／コース	高校1年生/GA・GS
使用教科書	数研出版「高等学校化学基礎」						
副教材など	数研出版「新課程リードα化学基礎」						

1. 担当者からのメッセージ（学習方法など）

化学の楽しさを感じられるような授業展開を目指します。授業の中では常に「なぜ」なのかを考えられるようになります。その「なぜ」を解決するために一生懸命に取り組むことで学力は向上します。化学の知識を蓄えるだけではなく、知識を獲得する過程で身につく様々な力を伸ばしていきましょう。1年間一緒に頑張りましょう！

2. 学習の到達目標

物質とその変化に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、物質とその変化を科学的に探究するために必要な資質・能力を育成することを目指す。

3. 学習評価（評価規準と評価方法）

観点	A:知識・技能	B:思考力・判断力・表現力	C:学びに向かう力・人間性等
観 点 の 趣 旨	自然の事物・現象についての概念や原理・法則などを理解しているとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本操作や記録などの技能を身に付けている。	自然の事物・現象から問題を見だし、見通しをもって観察、実験などを行い、得られた結果を分析して解釈し、表現するなど、科学的に探究している。	自然の事物・現象に主体的に関わり、見通しをもったり振り返ったりするなど、科学的に探究しようとしている。
評 価 方 法	成果物 パフォーマンス課題〈パ〉、授業・家庭学習の成果〈成〉、リフレクション〈リ〉、実験レポート〈実〉 ペーパーテスト 定期考査[考]、単元テスト[単]	成果物 〈パ〉、〈成〉、〈リ〉、〈実〉 ペーパーテスト [考]、[単]	成果物 〈パ〉、〈成〉、〈リ〉、〈実〉
成 績 割 合	成果物20%ペーパーテスト80%	成果物60%ペーパーテスト40%	成果物100%

4. 学習の活動

学期	単元名	学習内容	主な評価の観点			単元（題材）の評価規準	評価方法
			A	B	C		
第1編 物質の 構成 粒子	第1章 物質の 構成	1.純物質と混合物	○	○	○	A	①混合物を分離する操作として、ろ過、蒸留、分留、昇華法、再結晶、抽出、クロマトグラフィーなどの方法をあげることができる。 ②実際にそれらの方法を適切に用いて混合物を分離することができる。
						B	①純物質と混合物の違いが何であるか説明できる。 ②物質を分離する操作がどのようなものであるかを説明することができる。
						C	①身のまわりの物質が純物質と混合物に分類されることに興味をもつ。 ②身のまわりの混合物がどのような純物質から構成されているかに興味をもつ。
		2.物質とその成分	○	○	○	A	①炭素、酸素、リン、硫黄の同素体をあげることができる。 ②代表的な成分元素について検出法を理解し、実験を実施することができる。
						B	①いろいろな物質を単体と化合物に分類することができる。 ②単体と化合物の違いについて説明することができる。
						C	①元素の概念に興味をもつ。
		3.物質の三態と熱運動	○	○	○	A	①物質の状態と熱運動の関係を理解している。 ②物質の三態について、熱運動のようすを踏まえて説明することができる。 ③物理変化と化学変化の違いを理解しているか。
						B	①物質を加熱したり冷却したりしたときの温度変化をグラフに表すことができる。
						C	①日常生活の中の物質の状態変化について興味をもつ。
	第2章 物質の 構成 粒子	1.原子とその構造	○	○	○	A	①原子の構成粒子である陽子・中性子・電子の個数・電荷・質量の関係について理解している。
						B	①原子について、どのような粒子から構成されているかを説明することができる。 ②どのような原子が安定であるか、電子配置に基づいて説明できる。
						C	①原子がいくつかの粒子から構成されていることに気づく。 ②同じ元素でも粒子の構成が異なるものがあることに興味をもつ。
		2.イオン	○	○	○	A	①単原子イオンの電子配置を示すことができる。 ②イオン化エネルギーの概念を説明できる。
						B	①原子の電子配置から、その原子がどのようなイオンになりやすいかを判断できる。 ②イオンのなりやすさについてイオン化エネルギーや電子親和力の値の大小と関連させて考えることができる。
						C	①原子とイオンの違いについて疑問をもつ。
3.周期表	○	○	○	A	①元素の、典型・遷移、金属・非金属、陽性・陰性などの分布、および同族元素について理解している。		
				B	①周期表の中に周期律が見いだせること、周期律は価電子の数の周期的な変化によることに気づき、価電子の数と化学的性質の関連について説明できる。		
				C	①各元素の特徴および周期表上の元素の配列について興味をもつ。		

構成と化学結合

第3章 粒子の結合	1.イオン結合とイオン結晶	○	○	○	A	①イオン結晶を構成する陽イオンと陰イオンの種類から、イオン結晶の名称と組成式を書く方法を理解している。 ②イオンからなる物質の特徴を示すことができる。
					B	①イオン結晶中のイオンの配置を示した模型およびイオン結晶の性質について説明することができる。
					C	①身のまわりにあるイオン結晶の性質に興味をもつ。
	2.共有結合と分子	○	○	○	A	①共有結合とはどのような結合であるか説明できる。 ②さまざまな分子を分子式や電子式、構造式で表しその構造を考えることができる。 ③配位結合が含まれる錯イオンの成りたちを理解している。
					B	①原子間の共有結合を考えることによって分子の構造を予想することができる。 ②塩化アンモニウムの結晶にどのような結合があるかを説明できる。
					C	①身のまわりにある分子からなる物質の成りたちについて興味をもつ。 ②通常の共有結合とはできるしくみの異なる配位結合について興味をもつ。
	3.分子間にはたらく力	○	○	○	A	①極性を電気陰性度の違いによる電荷のかたよりと分子の形から理解している。 ②極性分子と無極性分子の性質の差異を実験により確認することができる。
					B	①分子の形を予想して、極性分子と無極性分子に分類できる。 ②分子間力や分子結晶の性質を説明することができる。
					C	①分子には極性分子と無極性分子があることに興味をもつ。
	4.高分子化合物	○	○	○	A	①高分子化合物の成りたちや構造を理解している。
					B	①付加重合や縮合重合について説明できる。
					C	①原子がとて長くつながった分子である高分子化合物に興味をもつ。
	5.共有結合の結晶	○	○	○	A	①共有結合の結晶の構造やその性質の関係を理解している。 ②ダイヤモンドや黒鉛中の原子の結合を、分子模型などを使って表せる。
					B	①ダイヤモンドと黒鉛の性質の違いを、共有結合の強さ、結晶構造、電子の移動をもとに説明できる。 ②分子結晶との違いについて説明できる。
					C	①共有結合の結晶にはどのような物質があるかに興味をもつ。
	6.金属結合と金属結晶	○	○	○	A	①金属もイオン結晶や共有結合の結晶と同じように組成式で表されることを理解している。 ②金属の特徴を実験で示すことができる。
					B	①金属特有の性質が自由電子によるものであることに気づき、金属結合および金属結晶の性質について説明できる。
					C	①金属特有の性質に興味をもつ。

、  
 〈成〉、  
 〈リ〉、  
 〈実〉、  
 [考]、[単]

第1章 物質 量と化学 反応式	1.原子量・分 子量・式量	○	○	○	A	①原子量・分子量・式量の定義を示すことができる。 ②原子の相対質量をもとに、分子や分子をつくらないものの質量を考慮することができる。
					B	①異なる質量の原子が混在する場合、その平均の質量を表す方法を見いだすことができる。
					C	①同じ原子でも異なる質量をもつものがあることに興味をもつ。 ②原子1個がいかに小さなものであるかを実感する。
	2.物質 量	○	○	○	A	①実際の物質の1mol分の量を示すことができる。 ②実際の物質の量を物質量で表せる。 ③同温・同圧の気体の場合、1molの体積が共通であることを理解する。
					B	①ある質量の物質の中に、原子や分子などが何個含まれているかを考えることができる。 ②モル質量の概念を使い、粒子の数・質量と物質量に関する計算ができる。 ③モル体積を用いて気体の体積と物質量に関する計算ができる。
					C	①多数の粒子を数えることは困難なので、まとめて扱うことが便利だということに気づく。 ②物質量の概念について興味をもち、粒子の数・質量・気体の体積との関係について説明できる。
	3.溶液の濃度	○	○	○	A	①濃度の表し方について、いろいろな方法があることを理解している。 ②目的の濃度の水溶液を調製することができる。
					B	①2種類の濃度の求め方を理解し、その換算ができる。
					C	①溶液の濃さの表し方について興味をもつ。
	4.化学反応式 と物質 量	○	○	○	A	①化学反応における、物質量、粒子の数、質量、気体の体積などの量的な関係を、化学反応式から読み取ることができる。 ②化学反応式を用いて量的な計算を行うことができる。 ③原子説の発見、分子説の発見にいたる物質探究の歴史を学び、化学の基礎法則を理解する。
					B	①正しい化学反応式が表せる。 ②化学反応式の係数から、物質の量的変化を質量や気体の体積変化でとらえることができる。
					C	①多くの化学変化は化学反応式で表されることがわかる。 ②化学反応式をもとに量的な関係をつかむことができる。

第2編 物質の変化

第2章 酸と塩基の反応	1.酸・塩基	○	○	○	A	①酸・塩基の価数、電離度などの考え方が理解し、説明できる。 ②H <sup>+</sup> の授受が実際に行われている反応を確かめることができる。
					B	①酸・塩基の性質をH <sup>+</sup> とOH <sup>-</sup> で考える方法と、H <sup>+</sup> の授受で考える方法から、酸と塩基を見きわめられる。
					C	①酸とは何か、塩基とは何かに関心をもつ。
	2.水素イオン濃度とpH	○	○	○	A	①水溶液中のH <sup>+</sup> の濃度をpHで表す方法を理解している。 ②身のまわりの物質の水溶液のpHを知る方法を身につけている。
					B	①pHの値から酸性、塩基性の強弱が判断できる。 ②水素イオン濃度と水酸化物イオン濃度の関係 (p.145 表2) を用いて、水酸化物イオン濃度からpHを求めることができる。
					C	①水もまた一部が電離しているということに興味をもつ。
	3.中和反応と塩	○	○	○	A	①中和反応を化学反応式で表すことができる。 ②酸性塩・塩基性塩・正塩などの分類について理解している。
					B	①塩の水溶液の酸性・中性・塩基性を判断し、説明することができる。
					C	①中和反応がH <sup>+</sup> とOH <sup>-</sup> の反応であることに気づく。
	4.中和滴定	○	○	○	A	①未知の酸や塩基の濃度を、既知の塩基や酸を用いた中和滴定により決定することができる。 ②中和滴定で使用するホールビペット、ビュレット、メスフラスコなどの器具を正しく扱うことができる。
					B	①中和の量的関係を数式で表すことができる。 ②滴定曲線におけるpH変化、中和点、使用できる指示薬について理解している。
					C	①身近な酸・塩基の水溶液も中和滴定によって濃度が決められることに気づく。
第3章 酸化還元反応	1.酸化と還元	○	○	○	A	①電子の授受により酸化還元反応が説明できることを理解している。
					B	①酸化還元反応に必ず電子の移動が伴うことに気づく。 ②酸化数を求めることによって酸化還元反応を区別することができるようになる。
					C	①酸化と還元は同時に起こることに気づく。
	2.酸化剤と還元剤	○	○	○	A	①酸化還元反応の量的関係を計算により求めることができる。 ②酸化還元反応の進行を、色の変化などの視覚的な情報をもとに判断できるようになる。
					B	①酸化還元反応の化学反応式を、酸化剤・還元剤のはたらきを示す反応式からつくれるようになる。 ②酸化還元反応における酸化剤と還元剤のはたらきを電子の授受に着目して説明できる。
					C	①酸化還元反応の複雑な化学反応式も、そのもととなる反応式と電子の授受を考えることによって完成させることができる。
	3.金属の酸化還元反応	○	○	○	A	①通常の酸と反応する金属と、王水や酸化力をもつ酸とのみ反応する金属との違いを理解している。 ②金属のイオン化傾向を利用して、金属を加工できる。
					B	①金属のイオン化は電子を放出する酸化還元反応であることに気づく。 ②金属固有の性質をイオン化傾向で考えることができるようになる。
					C	①金属樹ができることに興味をもつ。
	4.酸化還元反応の利用	○	○	○	A	①簡単な電池をつくることができる。 ②金属の製錬の方法について理解している。
					B	①電池や金属の製錬が酸化還元反応を利用したものであることに気づく。 ②電池の基本的なしくみについて、イオン化傾向や電子の授受に着目して説明できる。
					C	①身近にある電池の構造や反応のしくみに興味を示す。